

令和7年度

第1回丹後「子育て」サポート協議会の概要

1 日時 令和7年5月13日（火） 10:00～12:00

2 場所 京都府宮津総合庁舎 別棟2階講堂

3 出席者 丹後「子育て」サポート協議会会長
安藤久美子（京都府丹後教育局長）
丹後「子育て」サポート協議会顧問

杉岡秀紀（福知山公立大学地域経営学部准教授）

丹後「子育て」サポート協議会委員4名

多々納智（京都府宮津天橋高等学校 教諭）

野木俊宏（京都府立丹後海と星の見える丘公園 園長）

櫛田 啓（社会福祉法人みねやま福祉会 常務理事）

稲本朱珠（与謝野町高校魅力化コーディネーター）

各市町教育委員会担当者

事務局（丹後教育局）



4 協議の概要「丹後の『子育て』関係者の協働を生むための協議会メッセージの発信について」

(1) 協議会メッセージ案について

“わたしが決める”が 丹後(みらい)を創る

子どもが決めたことを大人は信じているでしょうか？

自分が安心して決めたことに 子どもは夢中になれる

夢中の先に 自ら育ち その子の未来が創られる

大人も子どもも 伸びしろがある一人の人間 子どもとともに 育ちあう者として
大人ができることは

立場を越えて対話をする

成功も失敗もひっくるめた ありのままの自他を受け入れ

丹後で生きることを楽しむ かっこいい等身大の大人を見せること

丹後で出会える人のつながりや体験をとおして 子どもの選択肢を広げること

寄り添い 信じ 待ちながら いつでも手を差し伸べる用意をしておくこと

“わたしが決める”は丹後発 未来への挑戦権

～大人も夢中になって 子どもとともに丹後(みらい)を創っていきませんか？～

ア 活用の形について

- ・メッセージをどこに、どのように示すかでイメージが変わる。メッセージの出し方を検討する必要がある。
- ・このメッセージを基本形として、活用場面に合わせて部分的に文言を使用するパターン等を検討する。

イ 文言の捉え方について

- ・「安心」が選択肢の多様性によって生まれるものではなく、すでに選択されていることによる「安心」が生まれることもあるのではないかと。「安心」の勘違いが起こらないように大人は気を付けなければいけない。

- ・そもそも「安心」とは何か？子どもが安心できるとは、どんな環境なのか？定義づけることは、大変難しいし、それぞれの世代によっても変わるものかもしれない。
- ・少し勇気を出して、難しいことにチャレンジするための安心できる環境という捉え方で「安心」を「チャレンジ」と置き換えることもあった。

(2) P T Aへの発信について

ア 発信を通して目指したい協働する大人（P T A）の姿

- ・P T Aは、昨今、組織としての在り方が揺らんでいる状況があるが、子どものために動く組織として現存していることを前提として発信する。
- ・メッセージ内の「立場を越えて対話する」という場面として、家庭なら親と子、学校なら面談（生徒と保護者と教員）を想像できる。メッセージを共有することでそれぞれが立場を越えて対等に話ができる状況を創りたい。
- ・「信頼して任されている。」という捉え方でいい場合もあるが、保護者が学校に任せ過ぎる状況を対話によって避けたい。
- ・「立場を越えて対話する」という場面について、保護者が先回りして子どもの言葉を奪わず、子ども自身の言葉で話せる親子関係が望ましい。
- ・地域、保護者、学校のつながりの輪を創っていく。話し合う場面が生まれることが重要である。学校運営協議会の中にそういった場面があることを期待したい。
- ・違いを面白いと感じながら対話できる大人の姿を期待したい。
- ・一人一人が自分の立場で何をすべきなのかを理解した上で意見をもっておく必要があるのではないか。
- ・今、子どもを主語とした学校教育が推進されており、社会教育とともに目指す方向性は同じという認識が教員にもできるのではないか。
- ・幼児教育の現場でも子どもの思いや願いを大事にしている。どのような立場でもこのメッセージの理念に共感できるのではないか。
- ・「子育て」のベースは人の育ち。大人もよき学び手である。大人の育ち、親育ちが大切である。保護者が対話しながら学び続ける姿、思考のアップデートを図る姿を期待したい。
- ・競争ではなく、共創する大人の姿や丹後の生活を楽しむ大人の姿を目指したい。そのような大人はカッコいい。

イ 協働へとつながる発信やメッセージの活用

- ・発信はコミュニケーションの一つであり一方通行ではない。メッセージをP T Aへ投げかけた後の動きを生み出したい。
- ・メッセージ全文でなくとも、一部の言葉でも活用されることが望ましい。例えば、キーワードや太字だけカードにして、P T A役員の会議や学級懇談会の議題としての活用も考えられる。
- ・メッセージを読むだけでは、「何をすればいいのか？」「安心して決めるとはどういうことか？」と疑問を感じるのみの保護者、教員もいるだろう。
- ・メッセージに対する疑問について、深掘りしながら親同士の学びが生まれることが必要である。
- ・企業なら理念に対して、具体的なアクションプランを練り、中長期プランに落とし込むことになるが、協議会メッセージについては難しい。抽象度が高いということは、自由度も高い。活用の在り方も様々と考えられる。

- ・行政機関は、メッセージの中にある様々なキーワードを見ると、社会教育事業で活用するイメージが膨らむ。

5 助言（杉岡顧問）

(1) 対話について

- ・本日も対話の重要性を再認識できる協議が展開された。
- ・高校生意識調査アンケートは価値のあるものである。継続すべき事業である。また、アンケート結果をもとにした座談会等による高校生へのフィードバックも大切である。対話することに価値がある。
- ・協議会メッセージを保護者や教員、児童・生徒たちにどのように落とし込んでいくかが重要であり、そこにはやはり対話は必要である。
- ・対話は民主主義と重なる。
- ・学校教育、家庭教育、社会教育の対話の中で、互いの違和感がぶつかっていく。その違和感を収める。妥協点を探ることで地域の民主主義を創っていくことが大切である。

(2) 社会的自立について

- ・福沢諭吉は、「Society」を「人間交際」と訳したことからも「人のつながり」が社会の原点である。自立は一人ではできない。人とつながりながら自立を果たしていく。
- ・本協議会として「自立」を「社会的自立」と明示したということは、本協議会の我々自身が人とつながる姿勢を世間から問われていくことになることになると自覚すべきである。

(3) 子どもの「自立」へとつながる事例紹介

- ・「自立」とは人のつながりも含め様々な選択肢を増やすことである。
- ・学校教育の中で探究活動は、広く取り組まれているが、教員がレールを敷いてしまうケースもある。探究活動の中にこそ「自立」へつながる姿が見えるべきであり、子どもが大人を巻き込み、大人は積極的に巻き込まれていくことが望ましい。
- ・ある地域の自治会では、公園の遊具や施設の老朽化が課題となり、大人だけで議論されようとした際、PTA役員を担っているある大人が「公園を使う子どもたちの意見を聞かずして、大人だけで決めるべきではない。」と訴え、子どもの意見を反映させる動きが創られた。
- ・このような状況を丹後で増やし、そこでPTAが動いていくことが求められるのではない。

(4) メッセージの発信について

- ・このメッセージを受け取った人が、どうアウトプットするかが重要である。
- ・「京都版親子健康手帳」には、成人したわが子へのメッセージ記入欄があり、保護者がどんな思いで我が子に関わったかを記入することで、親子が対話するきっかけになることをねらいにしている。
- ・丹波市総合計画の副読本は、子どもにターゲットを絞り、記入できる枠を増やした。アウトプットを通して地域を知る最初のきっかけにするねらいがある。
- ・丹後教育局HPからメッセージに何らかの記入ができる枠をダウンロードできるといったことも可能ではないか。
- ・できたものを配付するだけでは陳腐化する。親子で、学校の中で、対話を創る話題を提供するものがよい。
- ・インパクト重視ではなく、泥臭さや一生懸命さが必要であり、それが本協議会らしさを表すものとなる。

